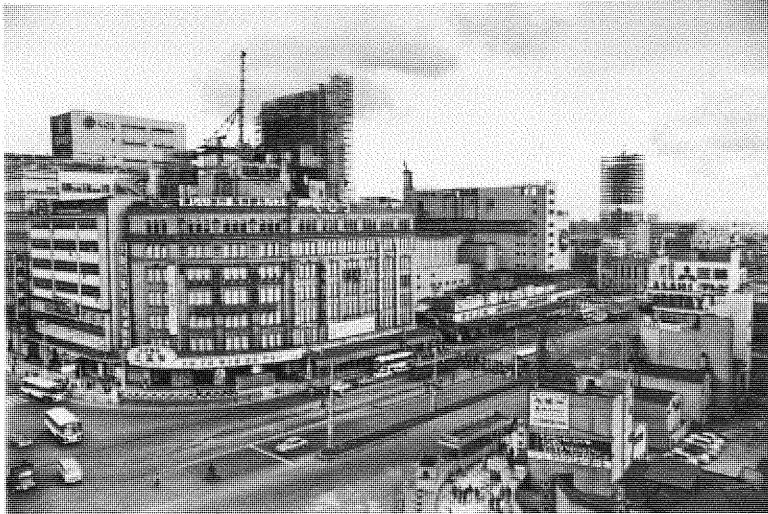


株式会社
そごう神戸店



明治三十二年六月二十五日、湊川神社の近く、相生町二丁目、わずか二十坪ほどの十合呉服店の神戸支店が開設された。これが「神戸そごう」の第一歩である。

明治三十四年に、元町五丁目に移転、本格的な呉服店としての体裁を整えた。さらに十四年から大正三年にかけて拡張を重ねた。第一次大戦後の好景気を背景に、十合呉服



▲増築工事をすすめるそごう神戸店 (S.43.12.15撮影)

店大阪本店は飛躍的に業績を伸ばし、近代的百貨店への道を歩みはじめ、大正八年に株式会社になった。

昭和五年に、神戸支店の三宮進出が決定された。国鉄の高架化、電化完成、省線電車の運転、阪神電車の地下乗入れ、阪神国道の完成、阪急電車の延長計画など、三宮は当時よりやくターミナルとして発展しつつあった。

そして昭和八年、新築の阪神三宮ビル（現在のそごう旧館）を賃借して、七階建て、三千坪余のターミナルデパートとして生まれ変わった。丁度四十五年前であった。店名も「神戸そごう」と平仮名表示となった。七台のエレベーター、四百名の大食堂、すばらしい展望の屋上庭園などのある新ビルは、たちまち神戸名物となり、開店日には、飛行機を飛ばして市内一帯に宣伝ビラをまき散らすなどの華やかなセレモニーが行われた。

昭和十三年七月の大水害では、旧生田川の川筋にあたる神戸そごうは、濁流の直撃をうけ、一階以下は水びたしとなり孤立した客と従業員は、飲料水がないので、金魚売場の水で炊き出しを行ったなどの出来事もある。

昭和二十年三月の神戸の大空襲で、三宮一帯は猛火に包まれたが、神戸そごうは類焼をまぬがれた。終戦後も、しばらくは配給業務のほか

は売る品物もなく、神戸そごうも売場の一部を、進駐軍相手の「富士桜ダンスホール」に賃貸したりした。(二十年～三十年)

昭和二十一年、大阪そごう全館が進駐軍に接収されたので、神戸そごうが主力店として重大な役割を担うことになった。二十二年四月、六、七階の接収が返還されると、「アメリカ・モード展」などの華かな催しも開催されるようになった。

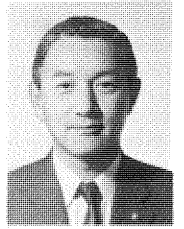
昭和二十五年ごろから二十七年ごろまで「インポート・バザー」などの在日外国人向け営業も手がけ、外国人の多い神戸では順調に収益をあげた。

二十七年六月、大阪そごうが再開された。三十一年、新聞会館・国際会館・市庁舎などのビルが建ち、三宮の復興、発展がめざましく進む中で、神戸そごうも待望の増築を達成、十月に営業を開始した。

三十二年夏の中元期から、神戸そごうは三宮センター街と共催して、景品付き大売出しを行い、ショッピングセンターとしての三宮一帯の雰囲気は大いに盛り上げた。ちなみにこの時の一等は、電気冷蔵庫または14吋テレビであった。その後夏と暮の売出し行事は共催するのが恒例となった。四十年にさんちかタウンが完成すると、センター街、さんちか、そごうが「サンノミヤ・トリオ」を組み、中元・歳暮大売出し・カーニバルや神戸まつりなどの催しを盛大に行い今日に至っている。

三十九年、店長に岡部誠一氏が就任。四十一年、隣接の室町殖産ビルを賃借し、更に四十三年、五十年と増築大拡張を行い、神戸最大、そごう全店中でも最大のデパートになった。

五十年三月岡部誠一氏は神戸店駐在役員となられ現在監査役、店長に山田恭一氏就任。



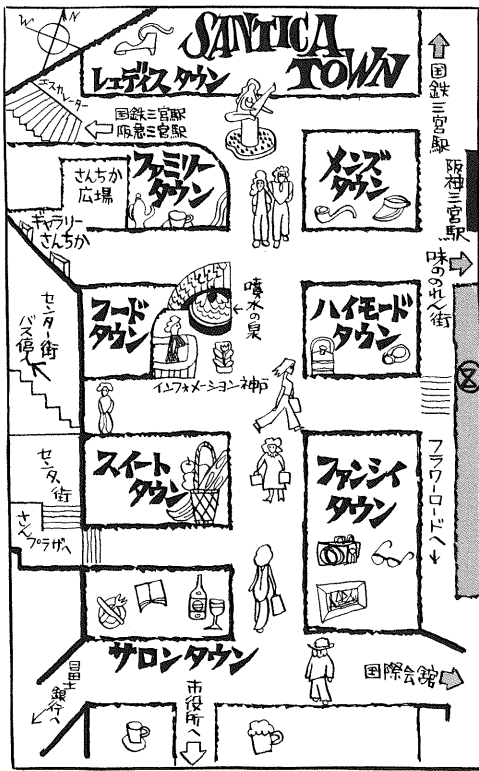
さんちかタウン

ターミナル三宮の、人と車の雑踏をスムーズにさばくために、歩行者通路とショッピング・センターをかねた地下街を造ろうという計画が、神戸市内部で昭和三十四年ごろから具体化していった。

色々な調査を行い議論を重ねられて、地下街のスケール、イメージなどについて、ほぼ現在の（改装前の）姿に近い最終案がまとまったのは、三十七年十一月である。

三十八年二月、神戸市と、阪神、阪急、そごう、神戸銀行、兵庫県、神戸高速鉄道などとの共同出資で、神戸地下街株式会社が設立された。

同年六月、工事中。工事請負は鹿島建設・藤田組共同企業体。四十年十月、第一期工



事竣工、同時に、国鉄三宮駅西口阪急三宮駅東口、阪神三宮駅などの改装も行われた。また、国鉄、阪急との連絡をスムーズにするために、あわせて交通センタービルが新築された。

四十二年第二期工事竣工、全フロアが完成した。同じ作るならば、神戸でなければ出来ない神戸らしいファッションナブルな地下街を、という基本プランに沿ってアイデアが出され、実現されていった。通路をストリートに広くとり、店舗は業種ごとにブロック分けして明るいオープン・フロアにまとめられ、レディース・タウン、スイーツ・タウンなどと名付けられた。明るい照明と、シックなカラー・コンディションニングなどで全体の雰囲気を作り、従来の東京、大阪などの雑駁なつぎはぎ地下街とは一線を画した。全国でもはじめての、統一されたデザインを持つ大規模な地下街が出現し、日本各地の地下街ブームの火付け役となった。

神戸を中心に、全国の有名店百余店が入居し、ネーミングも一万点あまりの公募の中から国際港都らしいシャ



ープで開放的な感覚と、関西的な親しみやすさをあわせもつ、さんちかタウン（SAN TICATA TOWN）と名付けられ、名店会を結成して初代会長に東條喜三郎氏が就任。

四十二年には神戸港開港百年の祝賀行事が全市を挙げて行われることになり、毎日新聞社の提唱で「神戸カーニバル」という新しい祭りが始まることになり、さんちかタウン、そごうとセンター街のトリオが結成され、カーニバルの参加団体となる。それより以後は中元、歳暮などの売出し行事を三宮トリオで共催することになり、三宮の商圈拡大に一大エポックを画することとなる。

国鉄、阪急、阪神のターミナルと、センター街、そごう、国際会館、新聞会館、市役所そして港湾方面を明快に機能的に結合し、国際都市コウベの地下のシンボルゾーンとしての役割を果している。

四十五年には、その年完成したさんプラザの地下街との間にしゃれた通路が設けられたさんちか以後、大阪梅田などに、さんちかのイメージの上に、趣向を積み重ねたショッピングエリアが次々と生まれた。

昭和五十一年、さんちかも、オープン十年を機に、気分一新すべく大改装が行われ、趣きもあらたに、インフォメーション・コウベなどの公共スペースも充実した。

この年名店会長を十年間勤めた東條氏が勇退、後任に片山和男氏が就任。今後、ポートアイランドへの新交通システム、地下鉄新長田―三宮―新神戸線の開通、国鉄三宮駅ビルの新設などが控え、地下のメインストリートさんちかの役割は、ますます大きくなるだろう。